

六  
花

り  
つ  
か

月刊俳句雑誌

2006

rikka haikukai  
designed by masami

7月号

一



六

甲

夕風に虞美人草の咲き立てる  
眠さうに鳩つるみをる梅雨晴間  
大鯉が蝶に飛びつきそこなひぬ  
犬枇杷に白南風吹いてをりにけり  
軽鴨の声のしてゐる青田かな  
目高かな蓮の周りに風吹いて

沢蟹を人差指で押さへけり  
片脚で蹴つて廻りぬ水馬  
水音の日傘にはねて来たりけり  
湧水をゆづり合ひつつ汲みゐたる  
噴水の向うへ子ども消えにけり  
音立てて雨滴の増ゆる浮葉かな  
汗拭ふときにばらけし首飾  
噴水の上にてすれ違ふ燕

千鳥

指先を遠き焚火へかざしたる  
薄氷を鴨踏み抜いてしまひけり  
着水のたび流さるる千鳥かな  
雪解水きれいな匂ひしたるなり  
牡丹雪あたたかさうに降りにけり  
春光の髪の前まで弾みたる  
春の水影洗ひつつ流れけり  
映るもの全て揺らして春の水  
雪解水鮎色に堰越えにけり  
かなしみの涙は春雨もて洗ふ  
春灯の広がりながら消えにけり

菜の花や沖ゆく船の空に入る

永田

勇

真つ青な空にくひ込む八重桜

花びらに追ひ駆けらるるばかりなり

星影に艶を増すなり薄桜

たこ焼きを掌で覆ひけり花吹雪

菜の花の大景を上手く詠んだ。菜の花の咲く時期には、海も空も区別が付かないようなぼんやりとした景色である。その景色の中の菜の花は明るく、沖行く船を余計に霞ませている。その船が水平線の向こうへ消えたことを「空に入る」と大胆に言い切った。実に菜の花の時期の海をよく捉えている句である。その風景が鮮明に読者に伝わる。

親と子の絆深めし流し雛

佐原 正子

春月のくつきりとある余寒かな

遠嶺は万年雪よ春霞

春光を受けてをりけり山野草

雑草の生え初むる庭春温し

流し雛とは、雛を流すことによつて、一家の災厄を祓う意味を持つている。江戸時代には古雛の損じたものを川に流した。現代はいろいろ雛を流して雛送りとしている。地方で雛を流す形態は違うが、祓うという意味は殆ど共通したものだ。掲句はその行事において親子が参加し絆を深めたのだろうが、その前に、流し雛を手で作る段階から徐々に親子の絆が深まっていったと思われる。そこを詠んだ。

磯ぎんちやく

貝森 光大

喉じゅうが毛むくじやらなり磯ぎんちやく  
 転がればはや還暦や四月馬鹿  
 厩出し尿線太く溢れけり  
 大空に帆を張る如し帰白鳥  
 初蝶の風の縫い目より出づる

天 平

梶浦玲良子

にんにくの整列したる検診車  
 天平の美女となりゆく薄氷  
 春の月からころ上がる下がるかな  
 菰巻きを外す複式深呼吸吸  
 雛壇を五人囃子が抜け出しぬ

# 檀木集

亀の名

松本文一郎

よいしよこらしよとは亀の名や春の昼  
囀のご縁と投げける五円玉  
鳥帰る顔かんぼせ隠す富士の山  
木瓜の花頼まれごとはメモにして  
畑打ちの腰を並べて伸ばしけり

春月

佐原 正子

春月のくつきりとある余寒かな  
遠嶺は万年雪よ春霞  
春光を受けてをりけり山野草  
雑草の生え初むる庭春温し  
親と子の絆深めし流し雛

桜鯛

三井 孝子

不器用に定年迎へ梅の花  
退職の夫を待ちゐる桜鯛  
花束と帰宅せし夫桜鯛  
戸を開けて臘梅の香を連れて出む  
水仙の咲くか咲くかと見る蕾

# 六花集

山田六甲選

五ヶ瀬川流一

竹の子の闇にまぶしくありにけり  
きらきらと波はじかせる春日かな  
日当たりの白木蓮に極まりぬ  
花万朶大道芸を人囲ひ  
五月雨や玩具箱めくビルの街

永田 勇

わかやぎすずめ

菜の花や沖ゆく船の空に入る  
真つ青な空にくひこむ八重桜  
花びらに追ひ駆けらるるばかりなり  
星影に艶を増すなり薄桜  
たこ焼きを手で覆ひけり花吹雪

春の雪積もりし朝の静けさよ  
咲き競う白と紅かな梅の花  
忘れたき想い覚ますな春の雪  
頬伝う涙が春の雪となる  
雪解けの水音胸に響きたる

親と子のきづな深めし流し雛

佐原 正子

退職の夫を待ちあゝる桜鯛

三井 孝子

団塊の世代のご主人であろうか、いよいよ今日晴れて定年退職の日。桜鯛は化粧塩をほどこした威勢の良い鯛しかも旬の桜鯛である。今日までさまざまな職場や家庭の荒波を乗り越えてきた祝いには激流に育って輝く明石か鳴門の桜鯛が相応しい。

よいしよこらしよとは亀の名や春の昼 松本文一郎

俳句は字面や文字にもたれたものは良くないが、この句は別。この亀の名前が俳句になると想像できるところも只の文字に溺れた句ではなく、なかんづく一匹の名前でもかまわない。なんともユーモアのある名前をつけて貰った亀の表情や歩く姿まで見えてきそう。

花冷や豆大福を手土産に

いば 智也

夜桜や雨の霽に頭垂れ

池崎るり子

春愁や以前泊まりし宿にゐて  
青鯉や母の思ひ出食ひ違ふ

岩松 八重  
角田 信子

朱の太く走る天魚や吉野川

K O K I A

「朱の太く走る」という勢いを感じさせる表現がとて  
もよい。急流にしかも冷たい清流に洗われて走り育った  
魚の特徴を鋭く捉えた。なお吉野川は石鎚水源と大台ヶ  
原水源とする二つがあつてどちらでも構わない。読者の  
好みに引きつけて味わえばよい。句はこのように焦点を  
絞ることが大切であるという見本の秀句。

新緑の間を光る瀬戸の海  
白牡丹舞妓の袖のかすめゆく  
春めける朝の日差や台所  
どこまでも続く花道深呼吸  
都府楼や雨水にけふる万葉碑  
姿なきうぐひす我を誘ふかな

武田 美雪  
延川 五十昭  
馬場 美智子  
松下 幸恵  
宮森 毅  
物江 昌子

鶯の姿を見る機会はありません。もつとも季語で鶯といえ、それは鶯の鳴き声を指す。それだけに姿を一目見たいと思うのは人情。姿が見えなければ見えないほど鶯に呼ばれているような気分になるのも正直な感想だ。

菜の花や沖ゆく船の空に入る

永田 勇

日当たりの白木蓮に極まりぬ  
雪解けの水音胸に響きたる

五ヶ瀬川流一  
わかやぎすずめ

雷解水には勢いがある。兵庫県と岡山の県境では高い山から急流になって落ちてくるように流れる川がたくさんある。作者の住む宍粟市山崎町近く、揖保川上流と井の洞門あたりでは春先急流が美しくも怖いほど。その雪解川の奔流は明るい春の期待感を高めるように胸を打つのである。

我一人のみが一人よ花の宴

平居 滯子

石を割る背に鶯の日射しかな

菊谷 潔

句読点のやうに咲きけり山桜

田尻 勝子

しばらくは花の虜になりぬたり

山本ミツ子

しばらくとは、桜をうっとり見とれていてる時間と桜が咲いている期間と二つあると考えられるが、掲句の場合うっとり見とれていてる時間として解釈しよう。通りすがりの桜の木か、見上げていてる内に虜になってしまった。桜には人間様々な想いが詰まっている。芭蕉も「様々のこと思ひ出すさくらかな」と故郷伊賀上野で詠んだ。

母の日や呼んでもみたまお母さん

松本 蓉子

搔き曇り声一斉の雨蛙

森本 密夫

明石の門うすけむる日や鳥帰る  
夏めくや運動場の白く見え  
うららかや近くなりたる淡路島  
石の下祖母を納めて油蟬  
法話きく膝に集まる花の冷  
春光や帽子を脱いで野道行く  
ごつごつと年輪刻む老桜  
場所取りに迷ひに迷ふ花の冷  
花の雨明日は入学式なりぬ  
青空へ入園式の吾子の顔  
大陸を近きに想う黄砂かな  
行き交うて若き母なり花あかり  
春風や髪の乱れの心地良く  
長雨の去るや葉桜玉光る  
春の蝶とびとびにある植木鉢  
水の上鳥が仲良く春惜しむ  
冴え返る近くに八百屋出来にけり  
鍋物の神戸和牛や葱甘し  
進水式近づく海の冴え返る  
口だけは達者につとめ春茶会  
春の冷え理の皮を敷く居間は  
桜狩り冷えたる母と嘘をつく

赤松浮世亭破綻流正義

中瀬 定子  
河島 和子  
横山 迪子  
出口 誠  
大上 保子  
筒井八重子  
延川 笙子  
三村 昭子  
霜寄恵美子  
金月 律子  
松本千勢子  
今本よしえ  
金月 洋子  
御影さざい  
村井アジト  
青木 洋介  
寺家みのり  
室生つみき  
澤井ガリブ  
堅山油味古  
稲美野某夜